

まえがき 佐藤慎也

佐藤慎也はつくりかた研究所の所長。建築家でありながら、建てるよりも場を見つめたり活かしたりを考えて、数多のアーートの現場に
関与。

四年後に東京へオリンピック・パラリンピックがやってくる。その頃には、新しい国立競技場が完成していることだろう。ザハ・ハジド案の白紙撤回から隈研吾案の再選定まで、ひとつの建築物を“つくる”ことが、こんなにも話題になったことがかつてあっただろうか。その一方で、五年前の東日本大震災以降、雑誌で「建てない建築家」が特集されるようになり、これからの新しい建築家には“つくらない”ことも要求されている。しかし、いくら建築家が交替しても、与えられる条件が替わらなければ巨大で巨額な競技場はつくられるだろうし、いくら被災地であったとしても、求められる建築物はつくられなければならないだろう。つまり、“つくる／つくらない”の二項対立が問題なのではなく、その“つくりかた”こそが問題ではないのだろうか。そして、この状況は建築に限った話ではない。

本書は、東京都内でひそかに活動していた「つくりかた研究所」という名のアートプロジェクトの三年間の記録であり、“つくりかた”を考え続けてきた研究員たちの文章をまとめている。

とめている。とは言え本書は、“つくりかた”を学ぶハウツー本でもマニュアル本でもない。タイトルに「問題集」とあるように、それぞれの研究員たちが“つくりかた”を考えるなかで直面した“問い”を言葉にしたものであり、そこには、もちろん“答え”は書かれていない。本書は三部で構成されており、「第一部」では創設者である長島確が設立からのアイディアの変遷を語り、「第二部」では長島が自治へと向かう過程で直面した理念的な問題を語り、「第三部」では各研究員たちが直面した問題を語る。最初から読むことをすすめるが、もちろん、どこから読んでも大丈夫。

被災地では、一刻も早い復興のために建築物が必要とされているかもしれない。オリンピック・パラリンピックの間に合わせるためには、一刻も早く競技場の工事を始めなければならぬかもしれない。ここでは、“つくりかた”なんて考えている暇はないかもしれない。しかし、こんなときだからこそ、あえて“つくりかた”に立ち戻る「つくりかた研究所」では、つくるかと思えばつくらなかったり、つくらないかに見えてつくりかた研究、周囲から見たら得体の知れない活動を真摯に続けてきた。ゆつくりと考えることでしか到達できない“問い”にこそ、即効性とは異なる重要な意味があると期待して。本書は、そんなアートプロジェクトという名の実験を続けてきた記録である。

所長として一言。東京アートポイント計画ディレクターの森司さんが、この研究所

の「裏」の創設者である。「戯曲をもって町へ出よう。」から「アトレウス家」を経て、「つくりかた研究所」までの七年間、ホワイトキューブからストリートにやってきた森さんにそそのかされるまま、ここまでやってきた。ここから先は、ホワイトキューブ（美術館）とかブラックボックス（劇場）とかストリート（アートプロジェクト）といった場所・制度の問題を超えて、「つくりかた」そのものを問題とすることによってどこまで行けるか、もう少し研究してみたい。本書が読まれることで、一緒に考えてくれる新しい研究員が増えるのであれば幸いです。